

シモーヌ・ヴェーユにおける 感受性の基礎的研究の証明と展開 〔II〕

村 上 吉 男

筆者は以下で、シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明を前回⁽¹⁾にかかわる引用文の提示によって試みるつもりである。

ところで、次回に取り上げることになろう証明11から証明18までの引用文を一見して気づくことは、sensibilité（感受性）の単語の近くでsouffrance, joie, douleur, malheur, souffrance physique, douleur physiqueなる単語のいずれかが使われるということである。このいくつかの単語はもちろん前回の証明1から証明10にも散見したが⁽²⁾、次回に掲載予定の引用文のそれらの数ほど多くはない⁽³⁾。また前回の引用文にはこれらの単語ばかりではなく、それらに意味上相似すると思われるほかの単語もやはりsensibilitéの近辺に出ているのだ⁽⁴⁾。

前回、ほかの単語をはじめ、なかでもsouffranceやdouleurなどの単語とsensibilitéへの言及があまりなかったのは、次回に比べるべきその資料を欠いたからである。筆者は次回、前回は含めたできるだけ多くの資料を参照しながら、souffrance, douleurなどの個別の内容を探るとともに、これらの単語とsensibilitéが近くにあることによって、それらのすべてはどのように捉えられるのかを明らかにしてみたい。それをみないことには感受性に対する筆者の考え方が完全なものになるといえない。ただし前者（これらの単語の個別の内容を探ること）については各引用文の分析に委ねることにし、ここではそれでも後者のことがその見定めのために問われよう。

後者に照明を当てさえすれば、感受性の基礎的研究の証明に関するそのほとんどのことがいつくされと先ほど述べたが、このことは感受性における残された問題が何かを示すことで可能になる。この問題とは、感受性が刺激や反射としてみられるにせよ、運動であり量である⁽⁵⁾というとき、これはいかなる

運動であり量であるかを明確にすることなのだ。その際に不可欠となるのが souffrance や douleur などの単語であり、それらの意味することと sensibilité をかかわらせてみるという視点が必要になってくるのだ。そこには果たして関係があるとされるのだろうか。

一言でいって souffrance や douleur は苦（不快）、joie は快の内容をおおよそもち、またどちらも感情（情動、情念）であるとみなすことに異議はなからう。この快や苦（不快）について、シモーヌ・ヴェーユはこうもいっている。すなわち、「私たちは生きものであり、私たちの思惟は快や苦を伴うものである。私が世界のうちにあるのは、私が外部のある物に依存するのを感じるし、逆に私はその外部のある物がほぼ自分に依存するのを感じるからである。私が外部の物によって屈服させられると感じるか、外部の物が私に屈服すると感じるかに応じて、私は苦や快を感じる。私が対象と名づけるすべての物、たとえば空、雲、風、石、太陽は、それらが私自身の存在を明らかにするのであるかぎり、とりわけ私にとって快であり、私の存在がそれらに自らの限界を見出すのであるかぎり、苦である」⁽⁶⁾、さらに続けると、「快や苦の味を帯び、私を感じ得るただひとつのことであるこの感情は、それゆえ世界の生地である。それが世界について私のいい得るすべてなのだ。…… 私に大変親密に現前する物は、私の存在そのものから切り離せないこの感情、物の仲介だけから私に現われるこの感情の現前によってしか私に現前していない」⁽⁷⁾といている。

前段の註6と註7は1930年の学士論文『デカルトにおける科学と知覚』からの引用である。そのなかで〈私たちの思惟は快や苦を伴うものである〉ことはシモーヌ・ヴェーユより見出されよう認識論にあって、快や苦（不快）なる感情（〈受動的感性〉）が思惟と結合されることだとしても⁽⁸⁾、注意すべきは感情がまず思惟に先立って機能しているということなのである。そして、この感情（〈受動的感性〉）が反射としてあり、その反射が彼女にあって混交⁽⁹⁾の反射であれば、ここではさらに、その感情を生み出すのに貢献しよう何か（それは刺激としての何かである）があると問うておかなくてはならないだろう。彼女の言葉でいいかえると、〈感情の現前〉を可能にさせる何かがなくてはならないことになる。

この何かを見出すに当たって、シモーヌ・ヴェーユの語る先の引用文が手がかりとしてあろう。たとえば、彼女は世界（外部のある物）との接触において、

①〈私が外部のある物に依存するのを感じるし、逆に私はその外部のある物がほぼ自分に依存するのを感じる〉と書き、②〈私が外部の物によって屈服させられるとを感じるか、外部の物が私に屈服すると感じるかに応じて、私は苦や快を感じる〉と記している。そこから、〈感じる〉という単語が同じ *sentir* で使用されるにせよ、①の〈感じる〉と②の〈感じる〉は異なっていると導き出せる。

思うに、〈私が外部の物によって屈服させられるとを感じるか、外部の物が私に屈服すると感じるか〉や〈私は苦や快を感じる〉と述べる②の〈感じる〉は感ずる内容をさすのであり、その強さ激しさにより〈感じる〉は感情、情動、情念であったりする。ちなみに、註7の〈私が感じ得る (*pouvoir éprouver*) ただひとつのことであるこの感情〉とは、〈快や苦の味を帯び〉るような感ずる内容をもたらす機能がこの感情（情動、情念）にしかないことを含意する訳であり、また知性（悟性）の機能（思惟）はその感ずる内容を冷静に論理的に考えさせたり、*souffrance* や *joie* の例からすれば、それらをおのおのの言葉になすように〈名づけ〉たりするにすぎないといっておく。

この〈感じる〉ことに関して、さらに先の引用文を続けて用い説明していこう。〈快や苦の味を帯び、私が感じ得る（ここでは明確に快や苦なる感情を感じるから *éprouver* が使われる）ただひとつのことであるこの感情は、それゆえ世界の生地である。それが世界について私のいい得るすべてなのだ〉は、何より〈私〉と世界のかかわりを語り、〈私〉の感情が〈私〉に〈世界の生地〉を生み出すただひとつの機能としてあることをさすように思われる。これは要するに、感情と〈世界の生地〉が等しいものであること、すなわち感情が〈世界の生地〉そのままを感じる能力になっていることを意味する。ただし、感情が〈私〉のそれとしてあるがゆえに、感情は〈外部の物が私に屈服すると感じる〉こと（それが同時に快）、〈私が外部の物によって屈服させられるとを感じる〉こと（それが同時に苦）のいずれかで〈私〉にもたらされてくるものとしてみることが肝要なのだ。だからここでいう〈感じる〉は感情としての〈苦や快を感じる〉感ずる内容を示唆するといえよう。

一方、感情を現に生じさせていることとは別に、快や苦を明らかにそれとして判断したり、この快や苦を生み出す外部の物を〈空、雲、風、石、太陽〉と〈名づけ〉たり、〈私の存在〉と関連させたりするとき、そこには知性（思惟）

が働いているとみてよい。〈それらが私の存在を明らかにする (manifeste) かぎり〉, 〈私の存在がそれらに自らの限界を見出す (trouver) かぎり〉, 外部の物が快や苦であるのはそのように読むことのできる例なのである。manifeste や trouver は知性の一作用を示す単語であることは明白である。また〈私〉が対象を外部の物にだけでなく、〈私の存在〉にまでわたり、その関連性を問うなどは思惟以外の能力に委ねることができないのだ。しかも〈私〉が快や苦との強い結合による思惟をせざるを得ない以上は、当然〈思惟は快や苦を伴う〉ことになる。

ところで〈生地〉の意味は「広辞苑」などを引きまとめてみると、「人工を施さない自然のままのありさま・性質」となっている⁽¹⁰⁾。この場合、前段までに語った感情それ自身が〈生地〉なのではない。〈生地〉は〈世界の生地〉でなければならない。感情は世界の人工を施さない自然のままのありさま・性質を快や苦のいずれかにおいて感じる (sentir) ののである。そして快や苦を感じる以上は、感情は世界の人工を施さない自然のままの性質よりも、むしろかかるありさま (状態) を感じることになるといえるのだ。(なぜなら快や苦 (不快) は性質ではなく、ありさま (状態) をあらわしているように思われるからである。)

さて、ここに至って次なる問題は、感情が〈世界の生地〉を直接感じるのかどうかを検討することである。直接感じるという答えを出すのであれば、先の引用文中の〈私が外部のある物に依存するのを感じるし、逆に私はその外部のある物がほぼ自分に依存するのを感じる〉と記される〈感じる (sentir)〉は必要とされる単語ではなくなるだろう。そんなことは絶対はない。この引用における〈感じる〉はシモーヌ・ヴェーユにとって〈感情の現前〉に欠かせないものなのだ。それゆえ、これは筆者も先に①と記して区別した〈感じる〉に相当するとみるのであり、②の感情 (感ずる内容) としての〈感じる〉とは異なるといったのである。そこで①の〈感じる〉は何か次に問わざるを得ない。

この〈感じる〉は註9に記したように、刺激としての〈感じる〉でなければならない。そうでないと、反射としての〈感じる (sentir または éprouver の感ずる内容)〉という感情 (受動的感性) が生じてこない、つまりこの〈感じる (sentir)〉を精神 (脳) が受け入れずに、感情の作用はシモーヌ・ヴェーユにあって成り立たないのだ。〈私が外部のある物に〉あるいは〈外部のある

物が私に依存する (dépendre) のを感じる〉という〈感じる (sentir)〉はそれが刺激にみなされる証となる。これこそ〈私 (精神)〉にとって〈世界の生地〉との始原的かわりをさしてくるように思われる。〈私〉は〈外部のある物〉によりかかって (dépendre) 生きている。その〈依存するを感じる〉とは〈外部のある物〉が〈私 (精神または身体)〉に入ってくることである。

〈私〉の感覚器官がその役割を果たし、「視覚、聴覚、嗅覚、温度感覚、触覚、痛覚、特殊空間感覚」⁽¹¹⁾なる諸感覚がこの〈感じる〉刺激に該当してこよう。そして諸感覚のうちとりわけ〈痛覚〉は感情反応を伴わせずにおかないとされたり⁽¹²⁾、「快や不快の感覚がある」とフロイトが指摘するように⁽¹³⁾、一般的には感覚が快や不快を生じさせると語られたりしている。

ところがシモーヌ・ヴェーユによると、再三引用する文章、すなわち「運動は私たちにたえず、ひとつの変化を含む触覚、体感、痛覚ほどの感覚をもたらす。しかしその変化とは質的であり、運動は量的である」⁽¹⁴⁾と語る引用から、筆者は今問題にしている〈感じる〉という感覚を刺激として認め得ても、フロイトのいうような〈快や不快の感覚〉の快や不快 (苦) を感覚として捉えることには懐疑的である。彼女に従えば、〈その変化は質的である〉とされる以上、フロイトのみる〈快や不快の感覚〉は、刺激として〈感じる〉のが〈世界の生地〉なる意味のなかでは性質をさすところに見合っていないなければならないことになる。また先に〈痛覚は感情反応を伴う〉と記したことからは、その感覚は彼女のいうようにやはり性質をあらわし、〈感情反応〉を生じさせるなら、感情は性質としての感情 (感覚的感情) を示してくるものでなければならない。筆者はかかる刺激としての感覚があることをここでも認めておこう。しかし彼女の立場でいうと、質的な快や不快や痛覚は問題にされることがないばかりか、あるいはそれらを質的なものとみなすかどうかにかかわらず、彼女は感覚に対して、デカルトと同様、「全幅の信頼を寄せない」⁽¹⁵⁾とすることに同意しているのである⁽¹⁶⁾。それでは彼女において、とりわけ快や不快 (苦) は一体何んであるのだろうか。

それはすでに、〈快や苦を感じる以上は、感情は世界の人工を施さない自然のままの性質よりも、むしろかかるありさま (状態) を感じるようになる〉と述べたところにかかわって見出されてくる。すなわち、世界の人工を施さない自然のままのありさま (状態) を感じる感情があるという場合、刺激としての

〈感じる〉がなくてはこの感情としての反射が成立しないと先にみたのだから、そこでは感覚なる刺激以外に、もうひとつの刺激がなければならないということだ。別な表現で記すと、〈運動は量的である〉とする量をもたらす運動（刺激）がなければならないことになる。そのことを明らかにしていこう。

かかる刺激、世界の人工を施さない自然のままのありさま（状態）を感じる感情に受け入れられる刺激は、シモース・ヴェユからみて、もはや感覚というものではなく、感受性でなければならないのだ。この感受性（sensibilité）も①としての〈感じる〉であるが、彼女にとって〈世界の生地〉との始原的なかわりを真に実現させよう〈感じる〉なのである。だからここでいう〈感じる〉は②である反射（感情）としての〈感じる〉ではない。しかし①と②の〈感じる〉に対して彼女が用いる単語は同じ sentir である。このことはどのように理解されるべきか。

そのことをまず註6に求めてみよう。〈依存するを感じる（sentir）〉は①の〈感じる〉、〈屈服する（屈服させられる）とを感じる（sentir）〉や〈私は苦や快を感じる（sentir）〉は②の〈感じる〉であった。ここにこれらの〈感じる〉はすべて sentir で記されるのだから、①を刺激②を反射として打ち出そうが、何より一連の関係が①と②に保持されて使われる単語であるとみることができる。しかも②が最終的に〈私は苦や快を感じる〉ことになるとすれば、①もその影響をまぬがれ得ないことを導き出せよう。そのように①と②を捉えないことには、〈依存する〉と〈屈服する（屈服させられる）〉という〈感じる〉ことの連続性の関係が生まれてこない。それゆえ、この同じ sentir の使用は①と②が関係していることを示しているのである。

また註7の引用文からも同じようなことが理解される。〈私に大変親密に現前する物は、私の存在そのものから切り離せないこの感情、物の仲介だけから私に現われるこの感情の現前によってしか私に現前していない〉という文章にあって、〈物の仲介〉と〈感情の現前〉に関係があるのかどうか問われてくる。両者には関係があるとみる。その関係とは〈物の仲介〉によって〈感情の現前〉が〈私〉に可能になるつながりである。〈現前（présence）〉は目の前に「存在すること」である。感情が存在する（感情が生じる）ゆえに、その因をなすもの、〈私〉には〈物〉を仲介させるものがなくてはならないことになる。いかえると、〈物〉の刺激が〈私〉になければならない、すでに述べたように、

〈物〉なる刺激が仲介されずに、その感情なる反射（〈感情の現前〉）は成り立たない、①の刺激の〈感じる（sentir）〉が〈私〉に受け入れられて②の反射の〈感じる（sentir）〉が生み出されてこよう、ということである。それゆえ、①と②は因果関係を保つ意味においても同じsentirが用いられていなければならないのである。

ここにシモーヌ・ヴェーユのいう〈受動的感性〉（感情）のことが想起される。刺激としての感受性と精神（脳）に局在する想像とが〈混交〉し、反射としての〈受動的感性〉が生じるとする。なぜこの感情が生み出されるかといえば、それはかかる反射が註9を参照して知る得るように、〈混交〉する際、感受性よりも想像のなかに占められるとされる感情的要素の優劣さ（量的に大）に起因してもたらされるからである⁽¹⁷⁾。そしてこの感情的要素が②としての快や不快（苦）を〈感じる〉ことにつながるのだ。そこで問題は〈依存するのを感じる〉という①の〈感じる〉が②の快や不快（苦）を〈感じる〉場合と異なるものであるのかどうかなのである。

これまでに触れた通り、すなわち、筆者は①と②にあつてシモーヌ・ヴェーユが同じ単語sentirを使用し、①と②が連続性や因果の関係を保有すると捉える立場から、①は②と決して異なるものにならないと理解する。いやこれはむしろ逆の見方をさせる必要さえあるといえる。つまり、②は①の〈依存するのを感じる〉ことによって〈屈服する（屈服させられる）と感じる〉のだから、①なくして②は問われない、この点では①の〈感じる〉方が②の作用を惹起させる誘導の〈感じる〉となる。その証は②の〈受動的感性〉なる名称自体にある。《sensibilité passive》は直訳すると、受動的もしくは受け入れられた感受性になる。そこでこれは、刺激としての感受性が精神や身体に入ってきて、ときに精神での反射（感情）としての〈受け入れられた感受性〉を生み出すことを示してくる。刺激としての感受性（sensibilité）の単語が記されずに、〈受け入れられた感受性〉なる単語（名称）の誕生もないし、さらにこの単語自体がすでに感情を意味するがゆえに、もはや〈受け入れられた感受性〉ではなしに〈受動的感性（sensibilité passive）〉ということになるわけだ。

同様に、〈受動的感性〉（感情）は快や不快（苦）なるありさま（状態）を〈感じる〉ことになるならば、①は必ずかかるありさま（状態）を誘発させる〈感じる〉でなければならないだろう。すでに述べた逆の見方なる論法でなお

もいうと、ここでは、〈受動的感性〉としての快や不快（苦）なるありさま（状態）を生み出す、想像に占められる感情的要素が作用するかどうかを問う必要などまったくないとみてよいのだ。①の〈感じる〉はその当初より快や不快（苦）なるありさま（状態）とかかわっているといえるのだから。

ここまでくれば先に残しておいた問題に解答が与えられてくるだろう。まず、〈souffrance, douleurなどとsensibilitéが近くにあることによって、それらのすべてはどのように捉えられるのかを明らかにしてみたい〉に対しては、それらのすべてが関係すると捉えられることを前段までに明らかにしてみたといえるのだ。そこではsouffranceやdouleur, joieの個別の内容（たとえばこれらの単語は精神的また身体的のいずれの意味を持ち合わせ使用されるのかの内容を問うこと）については次回に譲るとしたが、要するにsouffranceやdouleurは〈苦（不快）〉, joieは〈快〉であり、それらは精神がその苦（不快）や快をありさま（状態）として〈感じる〉反射なのだとだけはここでいうことができる（ただし、註14のsensation de douleur（痛覚）におけるdouleurはsensationの限定補語とみられる以上、本文でいうdouleurとは異なると指摘しておく）。sensibilitéはこれらの反射のために精神に受け入れられる刺激である。いいかえると、感受性は②の〈感じる〉における苦しみや歓喜を生み出す①の〈感じる〉であるから、苦しみや歓喜がもたらされるうえでその構成要因になっているとまずは理解する必要がある。

このときさらに問題になることがある。これについては前回も触れておいた⁽¹⁹⁾。それをここに抜き出す（一部補充）と次のようになる。〈苦しみと歓喜のタームはシモーヌ・ヴェーユにおける感受性の解明に当たって、必ずや関与するキー・ワードになるように思われる。（彼女のいういわゆる《不幸》もいってみればこの苦しみに与するのである。）〉〈苦しみ（あるいは歓喜も同様）が外的なもの（extérieure）であれ内的なもの（intérieure）であれ、《ただ感受性だけのなかにありますように》⁽¹⁹⁾とは、苦しみ（あるいは歓喜）が感受性にかかわって成り立つことを示唆させる。苦しみ（あるいは歓喜）はデカルトに従えば、いわゆる「情念」の一種となる⁽²⁰⁾。すなわち、それは感情がもっとも強く激しくなった反射（「精気の運動が生じること⁽²¹⁾」）である。彼女の場合、苦しみ（あるいは歓喜）が感受性を起因にして生み出されるとみて間違いのないだろうが、だからといって、この苦しみ（あるいは歓喜）は感受性が想像（そ

のなかに占められる感情的要素)と〈混交〉した〈受動的感性〉のもっとも強く激しい反射とのみみなしてよいのかどうかなのである。筆者はこれに否定的である。むしろ苦しみ(あるいは歓喜)は刺激としての感受性がそれ自体で単独に反射されるありさま(状態)であるし、その結果を知性によってこのように名づけられるにすぎないと捉えておきたいと記したなかの傍点部分がその問題となる。

この問題に対しては、とまれ、苦しみや歓喜が〈受動的感性〉(感情)のもっとも強く激しくなった情念として、もしくは刺激としての感受性がそれ自体で単独に反射される反射としてみなすべきなのか、苦しみや歓喜のさらなる個別の内容を探りながらも、それらの分析が要求されるにちがいない。この問題の解決に向けて、前回〈感受性の基礎的研究の展開を待たなければならない〉と書かざるを得なかったが、それを待たずとも、souffranceやdouleurなどが多く出てこよう次回の引用文の検討はそのいずれとみるべきかを欠かせなくさせるだろう。

いや筆者自身にはこの問題の解答はすでに用意されていたのである(その証明のみが残されることになろう)。シモーヌ・ヴェーユが苦しみや歓喜は〈ただ感受性だけのなかにありますように〉というかぎり、ひとつにはこの引用によって、souffranceやdouleur、またはjoieとsensibilitéの関係していることが明確になったのであり、もうひとつには、苦しみや歓喜が刺激しての感受性のさらなる反射においてもたらされる、つまり感受性のみの反射によって苦や快が生じる、そうすると刺激としての感受性自体に苦や快がなければならぬ、さらにいうと感受性は苦や快なるありさま(状態)を①の〈感じる〉として〈感じる〉とみなすのであれば、苦や快は刺激なる感受性自体の反射によるしかないことが明らかにされたからである。彼女もまた〈感受性の自然のままの反射〉と語っているのではないか⁽²⁾。筆者は以上を踏まえたうえで、彼女が反射(感情)としての②の〈感じる〉のではなく、刺激としての①の〈感じる〉方を現実に初めて、しかも刺激としての感受性がそれ自体で単独に反射される反射を現実に初めて明確に確認し得たのは工場体験(1934年~1935年)であり、これが学士論文と『哲学講義』そして『カイエ』(1941年以降のI, II, III, そのなかでも《感受性のなかの真空こそ、感受性以上に運ぶ》⁽²⁾とする見解)に達するまで彼女のかかる主張を一貫させることになると予想するのである。

そして今回の残る最後の問題は、㉑ 〈感受性が刺激や反射としてみられるにせよ、運動であり量であるというとき、これはいかなる運動であり量であるかを明確にすることなのだ。その際に不可欠となるのが souffrance や douleur などの単語であり、それらの意味することと sensibilité をかかわらせてみるという視点が必要となる〉こと、㉒ 〈《運動は量的である》とする量をもたらす運動（刺激）がなければならない〉と記しておいたことについてである。さてシモーヌ・ヴェーユにあって、この㉑と㉒における〈運動〉とは一体何を意味すると捉えればよいのか。註14の引用文の前に《運動の感官（Le sens du mouvement）》という見出しがある⁽²⁴⁾。これを運動を受け入れる（㉑の〈感じる〉という刺激）、あるいは運動する（㉒の〈感じる〉という反射）感官があると解釈してかまわないだろう（ただし㉒の〈感じる〉という運動のときには、㉑の〈感じる〉を受け入れる精神（脳）や身体にあってどちらかといえば、精神より身体の方で感受性がそれ自体で単独に反射される反射（㉒の〈感じる〉）が可能になろう。それは身体において、精神におけるような反射、たとえば〈受動的感性〉や〈受動的感性の思惟〉などが生み出されることはないからである⁽²⁵⁾。なぜならここに該当する運動には《passive movement もしくは passive exercise（受動的運動）》⁽²⁶⁾や《active movement（能動運動）》⁽²⁷⁾があるとされるからである。そうすると㉑と㉒の〈感じる〉こと自身が〈運動〉と捉えられることになる。この〈運動〉は精神（脳）や身体の㉑と㉒の〈感じる〉という動きではあるが、いわゆる精神（脳）を含めて語られよう身体の《automatic movement（自動運動）》⁽²⁸⁾では決してない。ここではすでにみたようにこの自動運動以外の〈運動〉が問われてこよう。

しかし、先の㉑と㉒の文章を合わせ考えるときは、〈受動運動〉（刺激）のみが問題になる。筆者はこの刺激として感覚のほか感受性があるということを強調してきたが、何よりこの場でその感受性の存在の最終的確認をしておかなければならない。そこで註14の引用文に立ちもどり、その要約を試みる。〈運動は感覚をもたらす、感覚はひとつの変化を含んでいる、感覚の変化は質的である、運動は量的である〉と。そこに質的である（感覚をもたらす）運動以外に、量的である運動がないということならば、〈運動は量的である〉というシモーヌ・ヴェーユの主張は通らないものとなるし、そもそもこの箇所は当初からなくてかまわないものである。この一文があるかぎり、これは量的である運

動、すなわち感受性をもたらす運動があるということだ。それゆえ後段にて運動のすべてが明かされるのを待つまでもなく、感受性があるということは認容されるのである。そしてこの感受性も感覚と同様、感覚器官に受け入れられるとっておく（何しろ今日の心理学や生理学においてさえ受容器官はこのような名称で語られるしかないからだ）。

〈運動〉なる言葉の意味を動きあるいは〈行動〉⁽²⁹⁾として理解することができようが、〈運動〉の受動的意味をここに再確認しておく、それは二つの①の〈感じる〉になる。ひとつは運動が感覚をもたらす〈感じる〉、もうひとつは運動が感受性をもたらす〈感じる〉である。そして感覚と感受性が感覚器官を通して受け入れられるわけだ。このとき感覚器官にそれらが同時に受容されるのか別々になのか問う必要がある。シモーヌ・ヴェーユにとって、〈運動は量的である〉とすることに主眼があるこそすれ、質的である運動（感覚の〈感じる〉）はたとえ同時に受容されるとみても、〈運動〉の意味を十分にいい当ててはこないように思われる。〈量的である〉運動が彼女にあって〈運動〉の中心概念となり、本来の意味なのである。その〈運動〉すなわち①の〈感じる〉（刺激）に対しては、もはや感受性しか該当させはしないのだ。それゆえ同時か別々かの解答として、この〈量的である〉運動がその前提であるかぎり、かつ彼女が運動には二つあるという明記を踏まえる必要があるかぎり、感受性は感覚とは別に受け入れられてくるということが出来る。そうすると〈感じる〉こと自身であるこの〈運動〉は感受性と換言することも可能だ。しかし今運動は感受性に等しいと結論を急いではならない。その答えは〈運動〉がどのように〈感じる〉動きであるのか、あるいはそれがなぜ〈量的である〉のかを検討してからでも遅くはないのである（このことは当然、残しておいた問題、つまり感受性がいかなる運動でありいかなる量であるかの解答を引き出すことに関連してくるとみなさざるを得ない）。

④の引用の二番目の文章で語られていることを参考にすると、シモーヌ・ヴェーユのいう〈運動〉はそれが含むひとつの意味として感受性に等しくなると捉えておくことができる（このことを彼女が究極に確実に知るのは工場体験であったとはすでに記したところである）。その箇所に出てくる *souffrance* や *douleur* は反射として苦（不快）なるありさま（状態）をあらわしていた。そして先にみたように、これを刺激として〈感じる〉のが感受性であった。また

ありさま（状態）自体は質的なものでは決してなく、量的なのであった。これを刺激として〈感じる〉感受性も量的でしかなくなるのだ。それゆえ刺激としての感受性は状態を〈感じる〉のであり、その量は状態量であるとみてよい。ここから当然のごとく予想できることは、運動が感受性をもたらすという場合の〈運動〉も状態をさし示しているそれでなければならないし、その〈量的である〉ことでなければならないのだ。そうすると状態とその量を仲立ちにして感受性と運動が関係していると導き出せる（なぜ刺激としての感受性自体に苦や快（状態）がなければならないかは、感受性〈感じる〉それ自体が運動していることをさすからである。運動は必ずや苦や快（状態）のいずれかになろう）。すなわち、感受性がいかなる運動かに対して、それが苦や快なる状態を〈感じる〉運動になり、感受性がいかなる量かに対して、それが苦や快なる状態量になる、このとき運動は感受性に明らかに等しくなるということである。感受性なる運動は、精神や身体が運動を受け入れるまたは刺激として〈感じる〉ことであって、苦や快なる状態を受け入れまたはその状態を〈感じる〉のでなければならないからである。苦や快なる状態を受け入れまたはその状態を〈感じる〉ゆえに、それは精神や身体にとって苦や快なる状態を量として受け入れ〈感じる〉その量でなければならないからである。

運動（刺激の場合）していると、苦や快なる状態を感じさせその状態量として受け入れられる感受性が生じる（それが生じること自体運動である）。この感受性について、筆者はさらに次のことを付記して今回の拙文を終らせたい。これは「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の展開」において扱われよう課題になると思われるが、そこでまさに苦や快なる状態やその状態量のことを展望せんとするとき、それらのことは彼女の以下の諸論文を除外しては何も語れないことを示唆させてくる。その諸論文とは主に『量子論についての省察』⁽³⁰⁾であり、あるいは『波動力学について』⁽³¹⁾である。前者やさらにいくつかの作品に問われる「エネルギー」⁽³²⁾または「エントロピー」⁽³³⁾は、これらが状態や状態量に関与すると捉えられるかぎり、たんに科学的問題として処理されるところにあるだけではなくて、確かに哲学的問題として検討されるべきものを含むとみておかなければならないのである。『量子論についての省察』は1942年に書かれたとされるが、これが筆者にとってあたかも突如生まれた作品ではないと受け取られるならば、この作品に先行しそれと結びつく科学的論

文が見出される必要があるだろう。もしそれが見当たらないのであれば、彼女が一貫した哲学思想の持主であるとする見方からも、そのつながりというものをこの感受性に求めてみる必要があるのではなかろうか。その通りなのだ。それゆえ感受性の問題は重要性を増すものになり、その問題提起はおよそ的はずれのものに決してなっていないと確信しているのである。

[統]

註

- (1) 新潟大学教養部研究紀要「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔I〕」(第25集, 1993年) 参照。
- (2) Ibid; 証明1に *souffrance* (1回), 証明6に *souffrance* (1回), 証明7に *souffrance* (2回), 証明9に *joie* (1回), *douleur* (2回), また動詞 *souffrir* (2回) が記される。
- (3) 各引用文中の傍線部分がそれである。
- (4) 前回の引用文におけるほかの単語の代表的な一例を上げれば、それは証明1の *heurté*, *comprimé*, 証明2の *cruauté*, 証明3の *pitié*, 証明4の *son d'un mot*, 証明5の *sentiments supérieurs*, 証明7の *fatigue*, 証明9の *cauchemar* などである。これらは、のちに本文に述べるように、不快(苦)あるいは快として捉えられもする単語なのだ。
- (5) 新潟大学教養部研究紀要「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔序〕」(第24集, 1993年) p.p.51-52参照。また本紀要註14参照。
- (6) 『*Sur la science — science et perception dans Descartes —*』 Simone Weil, Gallimard, P.49 《*Nous sommes des vivants; notre pensée s'accompagne de plaisir ou de peine. Je suis au monde; c'est-à-dire que je me sens dépendre de quelque chose d'étranger que je sens en retour dépendre plus ou moins de moi. Selon que je sens cette chose étrangère me soumettre ou m'être soumise, je sens plaisir ou peine. Tout ce que je nomme des objets, le ciel, les nuages, le vent, les pierres, le soleil, sont avant tout pour moi des plaisirs, en tant qu'ils me manifestent ma propre existence; des peines, en tant que mon existence trouve en eux sa limite.*》

- (7) Ibid; P.50, P.51 《Ce sentiment nuancé de plaisir et de peine, qui est la seule chose que je puisse éprouver, est donc l'étoffe du monde; c'est tout ce que j'en puis dire. … Ces choses qui me sont si intimement présentes ne le sont que par la présence de ce sentiment inséparable de mon existence même, et qui par leur intermédiaire seulement m'est révélé.》
- (8) 受動的感性と思惟の結合において、前者が後者に比らば優勢ならば、それは他律的・受動的な能力としての感情的思考を意味する（新潟大学教養部研究紀要「感受性試論〔Ⅳ〕」第20集，1990年，p.p.39-40，P.62註12参照）。またこの結合にあって、思惟が優勢となるならば、それは自律的・能動的な能力としての〈悟性によって導かれ幾何学によって定義される想像の思惟〉になろう。あるいは混交の段階における優勢な想像が思惟との結合時にあってもそのまま優勢であるならば、それは〈欺瞞的想像の思惟〉となろう。
- (9) 混交はシモーヌ・ヴェーユにあって、本文以下に記す刺激としての感受性と精神（脳）に局在する想像がその構成因としてある反射である。混交によって生み出される能力は①〈悟性によって導かれ幾何学によって定義される想像〉，②〈受動的感性〉，③〈欺瞞的想像〉である。三種類の能力のそれぞれの特徴は註8にならうところもあるが、一言でいえば①は想像のなかに占められる悟性（知性）的要素が当初より優勢，②は想像のなかに占められる感情—情動—情念的要素が優勢，③は①②以外の想像の要素が優勢な反射であるといえる。なお詳しくは新潟大学教養部研究紀要「感受性試論〔Ⅳ〕」（第20集，1990年），とりわけ表1（p.35），表2（p.39），表3（p.45）の周辺を参照のこと。
- (10) 仏語辞典もおよそ同様な意味がある。Grand Larousse de la langue française vol.3. Librairie Larousse. p.p.1770-1771 etc.
- (11) 『感覚』アンリ・ピエロン，島崎敏樹，豊田三郎共訳，白水社（文庫クセジュ），p.p.19-23参照。
- (12) Ibid; p.39参照
- (13) 『感情』金子武蔵編，理想社，p.51。
- (14) 『Leçons de philosophie』Simone Weil. Plon. p.39 《Le mouvement nous procure toujours des sensations de l'ordre du toucher, de coenesthésie, de douleur qui impliquent un changement. Mais le changement est qualitatif, le mouvement est quantitatif.》新潟大学教養部研究紀要（以下も同じ）（「感受

性試論〔V〕」第21集, 1990年, p.25註44。「感覚と感受性—デカルト, カント, ジイドとシモーヌ・ヴェーユ—(感受性試論〔VI〕」第22集, 1991年, p.61註137。「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔序〕」第24集, 1993年, p.51註6 参照。

- (15) 『Discours de la méthode』Descartes, Librairie philosophique J. VRIN. p.19 (『方法序説』野田又夫訳『世界の名著—デカルト—』中央公論社, p.239)。
- (16) 新潟大学教養部研究紀要「感覚と感受性—デカルト, カント, ジイドとシモーヌ・ヴェーユ—(感受性試論〔VI〕)」第22集, 1991年, p.p.51—52, p.p.59—61 参照。
- (17) 新潟大学教養部研究紀要「感受性試論〔IV〕」第20集, 1990年, p.35 (表1とその周辺), p.45 (表3とその周辺) 参照。
- (18) 新潟大学教養部研究紀要「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔I〕」第25集, 1993年, p.28 (証明9) 参照。
- (19) Ibid; P.28参照。(原文『Cahiers II』p.110, Plon 《Que la douleur soit, en un sens, purement extérieure; en un sens, purement intérieure. Qu'elle soit dans la sensibilité seulement: ...》中の傍線部分が本文の訳)
- (20) 『Les passions de l'Âme』Descartes, Librairie philosophique J. VRIN. p.p.133—135。また joie (歓喜) については同書 p.112, p.131, p.137, p.140, p.144, p.148, p.p.166—167, p.206 参照。
- (21) Ibid; P.P.131—132 (ARTICLE XCI La définition de la Joye.) 参照。「精気の運動」(le mouvement des esprits)。
- (22) 新潟大学教養部研究紀要「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔I〕」第25集, 1993年, p.26 (証明5) 参照。感受性の自然のままの反射 (les réactions brutes de la sensibilité)。
- (23) 『Cahiers II』Simone Weil, Plon, P.129 《C'est le vide dans la sensibilité qui me porte au-delà de la sensibilité.》(1941年)。
- (24) 『Leçons de philosophie』Simone Weil, Plon, p.39。
- (25) このことは筆者が従来から指摘しているように, シモーヌ・ヴェーユの心身論にあって身体の重要性が主張されるひとつの理由になるし, さらにここから, 新潟大学教養部研究紀要「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔序〕」(第24集, 1993年, p.52参照) に述べた通り, 彼女のかかる思想をく流動

し、動く存在としての人間の動きとして理解する学問〉として展望しつつ、人間の動きの中心であるこの身体の解明なくして彼女の思想の全体像もみえてこないと断言し得るのである。

また刺激としての感受性がそれ自体で単独に反射される反射は、刺激としての感受性が精神に伝わり、精神に局在しよう他の能力に比して優勢となるときである。優勢とは他の能力が〈混交〉しく結合する量より大きな量を示唆しよう。(新潟大学教養部研究紀要「感受性試論〔Ⅳ〕」第20集, 1990年, p.45 (表3) 参照)。

㉞ 『Medical Dictionary』DORLAND'S ILLUSTRATED, ドーランド医学大辞典編集委員会, 廣川書店, p.1175《身体のある部分に対する運動で, 他人, 器械, 他の外力またはその人自身の身体他の部分の随意的な力によって行われる。》

㉟ Ibid: p.1175《自分自身の筋肉で行う能動運動,》(むろん筋肉に精神が命令(反射)する際にはそこに伝達させるべき神経線維があるということがこの前提にある)。

㊱ Ibid: p.1175《器官内に起源をもつが意志によらない運動。》(これは〈感じる〉ことがないはずである)。

㊲ この〈行動〉については, 新潟大学教養部研究紀要「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔序〕」(第24集, 1993年, p.p.50-52と註8参照)で触れておいたが, 本文(後述箇所も含め)を参考にしてもらえれば, シモーヌ・ヴェーユのいう〈行動(action)〉と〈運動(movement)〉は受動的意味をもつとみなす面ではほぼ同義であると捉えておきたい。『Lettre à une élève』—『La Condition ouvrière』(Simone Weil, Gallimard, p.25)《La réalité de la vie, ce n'est pas la sensation, c'est l'activité—j'entends l'activité et dans la pensée et dans l'action.》〈人生の現実(的印象)ではなく, 活動—思惟と行動における活動である〉と今回の『Sur la science—Science et perception dans Descartes—』(Simone Weil, Gallimard, p.49)《notre pensée s'accompagne de plaisir ou de peine.》〈私たちの思惟は快や苦を伴うものである〉と合わせて考えてみると, 受動的意味としての〈行動〉は快や苦を生じさせている〈運動〉の意味になっていなければならない。そうしないと〈私たちの思惟は快や苦を伴うものである〉という根拠が見失われる。しかしこの〈活動〉における思惟にとって, 快や苦を伴う〈受動的感性の思惟〉が適当か, はたまた快や苦の要素を遮断する自律的・能動的思惟(今回紀要註8参照)が妥当なのか「一女生徒への手紙」から知ることは不可能である。しかし筆者の〈行動〉の捉え方, それと思惟との関係を

重視すれば、その思惟がく受動的感性の思惟（他律的・受動的思惟）〈今回紀要註8参照〉になることを否定するわけにはいかないだろう。

- ③0 『Sur la science — Réflexions à propos de la théorie des Quanta —』 Simone Weil, Gallimard, p.p.187—209, 1942年。
- ③1 『Sur la science — A propos de la mécanique ondulatoire —』 Simone Weil, Gallimard, p.p.269—270, 1941年。
- ③2 《énergie》に関して註30の作品には、40回その単語が出てくるし、また『La connaissance surnaturelle — Cahiers d'Amérique —』（1942年）のp.192, p.287, 『Ecrits historiques et politiques — En quoi consiste l'inspiration occitanienne —』（1942年）のp.75, 『Sur la science — La science et nous —』（1942年）のp.158を参照。
- ③3 《entropie》に関しては『Sur la science — La science et nous —』（1942年）のp.160を参照。